
月 刊

MéLange

Vol.131



2018.03.25

詩と評論

月刊「Mélange」

Vol.131 2018.03.25

「月刊めらんど」編集部

詩・俳句

さん月 ……………安西佐有理 03
abat-jour……………月村 香 04
なれなり ……………大橋愛由等 05
黒い服の女 ……………黒田ナオ 06
ガードレール ……………中嶋康雄 07
(HOME 連作) 階段……………大西隆志 08
流線……………野口 裕 08
鳥の道／一つの明日 ……………高谷和幸 09
サイクル・クリニック ……………高木敏克 10
アミアン／エタプル ……………北岡武司 11

連載／エッセイ

神戸詞あしび 120 「J と G を奪還するためにひたすら読書したこと」……………大橋愛由等 12

表紙の写真は、沖永良部島・田皆岬の灯台（撮影・大橋愛由等）
第131回「Mélange」例会の読書会は、獣医師で詩人の北野和博氏の語り。
「一獣医師がみた、生命、宇宙、文学。命はどうして生まれたのか」がテーマ。

編集部だより★50／小学校を卒業して50年がたった。これを期に同窓会をしようと提案があり、3月14日（水）に大阪・梅田に参集した。私が通った小学校は、日本でも200校ほどある私立小学校のひとつで、カトリック系ミッションスクールである。イタリアのアッシジに本拠地があるコンヴェンツアル・フランシスコ修道会が運営している仁川学院というところ。西宮市にある。われわれは、7回生であり、初期の頃の卒業生だった。クラスはふたつあり、同窓会も2クラス合同で行われた。わたしは1組にいたのだが、出席者は圧倒的に2組の卒業生が多かった。それでも全体で60人ほどの生徒数なので、6年間のうち一回はクラスメートになったことがあるので、その親和性は濃いものがある。司会をした者が賛美歌を歌おうということになり歌詞が配られた。在学中は繰り返し歌っていたこともあってか、歌詞をなぞって歌うことができた。カトリックは神父、シスターという神との仲介者の存在が大きく、教会というメディアが、われわれ生徒たちに立ちはだかっていた。このカトリックの環境に身をおいていた事実が今となって私に大きな意味をもたらしているのである。（大橋愛由等記）

◆さん月

安西佐有理

まどろみに告げる声あり「此岸です」

ふわふわと幾多の春が沖の上

まぼろしを幻にして plastic song

やってきたのはなんねんまえか、きのうだったか。あまりにたくさん、おおきなこが、そこにながれついて、ゆめのなかにまでおしよせているのにも、わざとぎがつかないくらいだったのに。かぜがふき、あめがふって、きがついたら、はこは、ほんのすこししかなかった。みしつたすばいしようせつがはいっていた。

◆ abat-jour※

月村香

四時までいや三時までアイロンをかけなければならぬ青色の幻想少しも目覚めていないあの日の点灯の傘からこぼれる直径三センチほどの石それは目に見えないあらゆるものを目から外そうとするのは携帯を捨てたという美しい過失書く者が書きたくて震える石は額よりなだらかにこぼれ書く手のペンにすくと落ちるとわたしの詩を邪魔にする理由がわからないそうしてわたしが何故無垢ながら邪魔にされるかがどうしてもわからないそれが一つ目の理由

※abat-jour(電灯やランプなどの笠)

◆ なれなり

大橋愛由等

石鳴りがする裏庭から群魚がやってくる

(石鯨とわたしの区別がついていないことに気づいた洗面所からその日が始まることを容認せざるを得なくなり生成りの一輪挿しに昨日の気鬱を指してから外出するつもりでいたけれど、鴉が「黒羊の群れから相対化が生まれる」と三日前にわたしに語りかけていたことを思い出し、「なにもかもえぼけーして一日を過ごすしか」と語り返す他者を探してみても、こんな時にかぎって他者は見当たらず、意味と名辞が固着した洋菓子のお包みを開けながら、「もしかしてこの洋菓子からも拒絶されるかもしれないね」とせめてもの二人称風に発話したのである。陽が神話どおりに風の神どもに脅されて西方の山並みに泣きながら逃げ込むころ、近づいてくる群魚に名付けをしようとゲール語の辞書をくりながらあれやこれやと思惟をめぐらせていると、感応がにぶい洋菓子がようやく「すべては高い壁の中のできごとです」と言ってきたのでそろそろアイコンを棄却する場所を特定しようと春の雌蛾が飛んでいった方向に歩きだしてみると極微がこちらで高笑いしながら飛行しているさまが見てとれたので風を切り刻むための万能銚を持ってこようと踵を返したのである。一度だけ会ったにすぎない黄僧がなれなれしく「黒羊がね、ぼくにね、(わたしの毛で首巻きを編んだげる)と言ってくれてね」とひとり語りを始めたので昨日の気鬱がたまらなく内発してきて黄僧の語りが終わるのを待ちながらきつとこんな瞬間にも相対化が進んでいるのに違いないと想いつづけていた、としよう。

◆黒い服の女

黒田ナオ

くねくねくねくね
踊っている女がいる
体にぴったりの黒い服を着て
右から左
左から右へと
蟹みたいに横歩きで
踊りながら歩いていく
真夜中に
街灯の下を
蛾や黄金虫たちに囲まれながら
ひとりで踊る
くねくね歩く
コンビニの前も
踊りながら歩いていく
気がつくとも
昼間もその女を見るようになった
子供たちは
みんな一緒に

笑いながら踊り始めて
くねくねくねくね真似をする
でも学校帰りの中学生は
友達同士しゃべったり
スマホを見たりと忙しくて
女には気づかない
あんな可笑しなダンス見たことないのに
全然気づかない
どこから来て
どこへ行くのかわからない
テレビを見ていると
恋愛ドラマの真ん中で
踊りながら横歩き
せつかくいいとこなんだけど
主役の恋人同士よりも
つい女の方を見てしまう
怪しいダンスが気になって落ち着かない
だけど夫も息子たちも気づかない
ドラマを見ながら夕飯を食べて
そのまま炬燵でごろんと寝ころんで
テレビを見たまま動かない
ほら、このダンスの女の人
と指差しても
何のこと、うるさいな

て顔してる
ニュースの途中で気がついた
国会の真ん中でも
女が踊り続けている
総理の前を横切つて
居眠りしている大臣の横で踊っている
だけど誰も気づかない
くねくねダンスで笑わない
キャスターたちも笑わない
あんなに怪しい踊りなのに
と首を傾げているのは、わたしだけ？
どこから来て
どこへ行くのかわからない
あるとき突然現れて
体にぴったりの黒い服
半分開いた口もとに
にやにや薄目で笑いながら
何も言わずに踊っている
ただくねくねと
体をゆらし
右から左
左から右へと
わたしの視界を横切つて
夢の中まで現れて

◆ガードレール

中嶋 康雄

茶色い歯を見せて笑った
車が猛スピードで走り去った
斜め上を見上げると血の夕焼けを背に
ペランダで洗濯物が泳いでいた
野原でプラスチックごみが燃やされていた
刺激臭のする黒い煙が洗濯物の方へ流れていた
洗濯物を見上げながら
口の中に手を突っ込んで
今朝できた腫れ物をぶちゅと潰すと
薄い皮膚が垂れ下がり
ますます気障りになってしまった
歩道と道路の段差のちよつとした窪みに
雪解け水が溜まっていた
ピンクの水着を着たおばさんが泳いでいた
窪みから上がると
せつかくのピンクが汚れてしまっていた
ぶるぶる震える濡れそぼるおばさんを追って
黒いダウンジャケットを着た男が窪みから上がった
男のダウンジャケットは濡れていなかった
おばさんは男に追いつかれると呟いた
「もうあんたの好きにしておくれよ」
男は発砲スチロールを踏みじるような笑い方をした
男の髪とダウンジャケットに
尖った種がびつしりとくつき
男の瞳は全く落ち着きがなく
眼窩の外にまでふらふら泳いでいた
男はおばさんの両手首に錆びた手錠をはめた

おばさんをズルズル引きずって
枯れたセイタカアワダチソウの根元に座らせ
水着を脱がせ
そのまま放置して立ち去った
おばさんは手錠をがちやがちいわせて
紫の唇のまま歌を歌った
錆が落ちた
歌はピンクレディーのヒットソングのメロディーだった
未確認飛行物体は故障で修理中だった
警部は洞窟内で居眠り中だった
踊り歌いながらおばさんは裸のまま
ガードレールを手当たり次第に食べた
尻をふりながらガードレールを食べた
ふられる尻から屁が何発も出た
定刻をだいぶ過ぎていたが
目当てのバスはまだだった
別方面行きのバスが走り去り
おばさんは排気ガスを吸って咳をした
おばさんは血が混じった涎を垂らし口を開いた
噛み砕かれたガードレールの破片が
歯の間からこぼれ落ちた
おばさんは呟いた
「あんたのバスはもう死んだよ」
ガードレールの囁かれた部分が
虹色に光った
おばさんはちよつと笑うと
また黙々とガードレールを食べた
肌が乾きかけると皺が目立つた
踏んづけると厭な音がした
靴の底に未消化のガードレールが刺さった
おばさんの目玉が藪に転がり
ガードレールをじつと見ていた

◆階段 (HOME 連作)

大西隆志

膝の痛みにおびえていた
段差は気にならないのだが
ゆるすぎてどこにたどりつけるのか
白日と暗闇のなかを壁に指をそえ
手すりを使うように階段を進んでいく
この家によつてきて何日が過ぎたことだろうか
啓示があつたわけではない
かくされている螺旋の秘密について
内なる中心に開かれている世界での唱歌に
ひかれていたので気付いたようだ
槌打つ音が響く
貧しい農民の次男、三男の入隊に小旗は
小さな村にも翻っていた
トンテンカン、トンテンカンと
内なる声に響いていた
時代の間隙には回転木馬のスライドする運動
下部の日常は上部の選択に活かされるのか
屋根にはサーカス団の帝国印の時計
真柱に向かつて階段がいくつものびている
高低差のある場所にある昭和維新のテロの血飛沫
刹那として腹を切り、首を落とし
死の昇降の構築されたタイルを踏みつけているのか
外なる光景には一億の栄光が剥がれはじめていた
聖地への階段、そこには亀裂による溪谷
踊り場に足を踏み入れている箴言に注意のこと
ポケットに届くメッセージには
分割された足が記されている
坂道に描かれていたのとおなじのよう
蹴上げの言葉は目線の高さで
水平に詩を滑らしている

◆流線

野口裕

なんだろう この流線
車窓からぼんやり眺めていると
やおら視界に現れて
上がった下がつたり
遠ざかったり近づいたり
よく分からないまま
ひたすら後ろに後ろへと
少し投身の恐怖を含みつつ
もしも地下鉄なら
さらに恐ろしく
流線の出す黒い絵の具が
走る壁を塗りつぶす
それは
夜を走る馬上の人が受けたものと
どこが違うのだろう
あなたは同じと言ひ
私は違うと感じる
まあいい
眼を閉じれば
流線の幻が
連弾を始める

◆鳥の道

高谷和幸

建物の二階
窓から欄干が見える
ことばの教室でわたしたちは集会をしていた
あなたの話す声がすぐそばにあり
手のある部分だけが
温かい陽差しがあたっている
その時
小さな鳥の声が聞こえてくる
Canaryよりも高い周波数の
わたしたちは異常さに気づかずにはいた
死がその屈折を変えて
あなたからも
手のぬくもりが
去っていくような予感を悲しむことになる
羽ばたくときから
役に立たないものを捨てていった

◆一つの明日

高谷和幸

わたしたちは那岐山麓の美術館にいる
コンクリートの建物の中から
中庭へと開かれた
ルッキング・グラス
水を湛えた
さざなみが
乱反射して
ネガのように見える
その身体のために
ことのほか大きいテーブルと
水が用意されようとしている
わたしたちは自分の触れるものや
歩幅の感じるものが
減算していくように思えただろう
何年前かにあなたは水を飲んだ
帰ってきて
知らん顔をした
あの子がそう
わたしたちは明日の一つを忘れていく

◆ サイクル・クリニックス

高木敏克

わたしは永遠の現在をとらえようとして今日もペダルを踏んできた。並木の入りではみつめあいながら手を取りあつての前乗りでゆつくり深く、川の見える下りではハート形のぎりぎりの後乗りで腰を浮かせての高速回転で。風の花園も狼の態勢で乗り切つたが永遠の現在はいかにとらえられなかった。

そこで町の自転車店ガレリアに戻つてサイクル・クリニックスを受けることになった。

ローラー台に乗せられたとたんに、高い声で

サイズが合つてない！とひとこといわれた。

それだけのことでわたしと自転車が別れることはない。

あたらしい新しい自転車を売りつけられるだけならばやく帰らなければとおもひ、

わたしは小さなサイズが好きなのだと言論した。

小さいほうが運びやすいし嵩張らないし目立たないのだから。

いや、サイズは一致させなければならぬ。

あなたにはもつと大きな自転車が必要です。

ええ、わたしとおなじサイズの自転車ですか？

あなたのサイズは570ですが、相手は560くらいが最適です。

そのほうがピストン運動の回転がなめらかになります。ためしにこれに乗つてみてくださいエネルギーがなくなります。そういわれて私は鏡の中のローラー台に乗つた。たしかに安定感がありうるちよろしくなつた。

自転車のヘッドもフレームも美しくバランスが取れていた。

そんなみてくれではない問題はあなたとのバランスですよ。

そういわれて何も買わずに帰ると部屋はいつまでも真っ暗闇で、点灯すると鏡のなかから背の高い女があらわれた。

あなたが大きな自転車を何台も持っていることは知つてゐるわ。だから来たのよ。

それだけの理由でできたの、引き留める理由ならいくらでもある。わたしだつてここにいる理由はいくらでもあるわ。

永遠の現在をとらえようとするいろいろのことはガレリアもわかつてい

るわ。着飾つた二人は深夜の三時だというのにローラー台に乗ることになつた。

鏡の中に花粉症の風が吹いて花が咲いた。

ローラーは過熱してグーグーと息をあげながら闇の中で回転する。

回転アレルギーの体液のすべてが吸い取られて沈む大船に乗つて、

二人はゆつくりと太平洋のまんなかを漂つていく。

見るこゝろによつて消えてゆくものがある。

語るこゝろによつて沈黙することもある。

それらが鏡の中で騒ぎ出し夜の海流がなめらかに回転している。

◆ アミアン

北岡武司

異質な波長流れ

聖化へと吸い込む真空の力

怖さに心こわばり

わが身を守ろうとする

澄明な明るみの広がり

祭壇わきのマリア像

十字架上のイエスが

ほのかに浮かびあがる

あなたは跪き一心に祈る

ペールをかぶつた横顔は

やはらかな光さえぎり

ステンドグラスたかくのびる

跪き 赦しを乞い

払つた犠牲の大きさを忘れ

わが平安を祈つてくれている

思いは肩越しにつたわる

まことなきわれなれば

罪忘れ 冷たさにも知らぬふり

心うつろに祭壇みやり

なお大罪の連続で時をみだし

あなたをも神をもつきはなす

隣で息をする生身の体

両手から垂れたロザリオ

肋骨が茶褐色に光る

掌釘付けにされ

首はうなだれ

アミアン大聖堂の天井は

見あげるに高すぎて

パラソルの日陰で

エビに添えたマヨネーズが旨いと

驚くそぶりと笑顔をこちらに送る

パラソル下で懸命に笑顔をつくるが

祈りが失望に負けそうな色

海浜のむこうはさめざめとした青

隣のパラソル下で昼食をとる漁師たち

翳りなき笑顔をこちらにむける

ひとりが「モチ・モチ」と

親指と中指をこすりあわせ

他方の手でワイングラスをもちあげる

半分つこ と言っているのか

仲良くね と言っているのか

ふたりを祝福してくれている

北の人々の 国よりも北

漁師たちの顔は精悍に日焼けしている

あなたの背後に広がるドーヴァー

その心のようにさめざめとした青

その海のようにさめざめとした心

明日 海岸沿いにカレーへと北上する

◆ エタプル

北岡武司

ノルマンディー北の地域

レストランの庭園にしつらえられた

うた 神戸詞あしび

120-2018.03.25 大橋愛由等



〈2018.05 カフェ・エクリ〉会場はたつの市の「ギャラリー・ガレリア」。詩人、美術家、柳人、養蜂家などが参加して行われた。

論で展開された（言語で対象を語る）こと、詩の会で発表すると、事前に関係する書籍を大量に読むことで知の蓄積に大いに寄与するの

副産物といおうか、詩の会で発表すると、事前に関係する書籍を大量に読むことで知の蓄積に大いに寄与するのである。発表に関して書架にそなわっている書籍だけではたりず、あらたに購入する本もある。テーマにそつて読書していくと辛づる式に読むべき本が出てくるのは不思議な現象と言えよう。しかも発表にちかい日に読み始めた文献が重要なものであることが多く、焦ることもしばしばである。さらに発表した後にふと書店に寄ったりネット検索していると、テーマに沿ったそのものの書籍を見つけたたりすることもあったりする。

三月五日（月）たつの市で行われた「カフェ・エクリ」で久々に読書会の発表を担当した。テーマは「JとGを奪還せよ」という勇ましいもの。Jはキリストではなく情況に対して異議申し立てをつづける青年イエス。Gとは漢籍による釈迦ではなくサンスクリット語から日本語に直訳されたテキストから読み取れる悩めるひととゴータマ・ブツダ。この二人の読み替え、捉え直しをあらためて自分の中で言説化してみようというのが発表の骨子である。イエスに関しては、赤岩栄、笠原芳光の識見を頼った。仏教に関しては、サンスクリット語から訳された経典をはじめとして、ナールジュナ（龍樹）の〈中観論〉についての文献をあらためて学習したのである。中観論で展開された（言語で対象

JとGを奪還するため ひたすら読書したこと

を語る）こと、詩の世界にも敷衍できて、詩論として語ったので、それは別稿で展開することにしよう。

先に発表したあとにテーマそのものの書籍が見つかったりするものだと書いたが、仏教についてまさにその通りの経験をした。発表が終わってころ軽々とジュンク堂書店を徘徊していると、佐々木閑著『大乘仏教』（別冊NHK100分de名著）を見いだし購入して読んでみた。ところがこの本、大乘仏教がどうして生まれたのか、生まれた経過をわかりやすく解説していて、部派仏教から大乘仏教が生まれた「必然」についても簡明に記述している好著だった。いままでばんやりとしか理解していなかった大乘仏教という存在も解き明かしてくる。

わたしが「Gを奪還」するとしたのは、仏教を開創したゴータマ・ブツダが、大乘仏教においてイコン（仏像）にしろ、信仰にしろ、諸仏（阿彌陀、薬師、地藏、弥勒、大日など）の後景に退いていることが不思議だった。それはゴータマそのものを漢籍からではなくサンスクリット語から日本語に直訳されたテキストで接していたわたしにとって、解決すべき問題であった。

その解はわたしが日本仏教の基礎的知識をおさらいすることで理解にいたったのである。①日本にはいきなり大乘仏教が渡来して、ゴータマ・ブツダそのものありようを記述した仏典（阿含経）などは伝わってはいったが重要視されなかった。②その大乘仏教は「大乘非仏説」の立場であること。つまり日本に到達した時点ですでにインドでは「いくつものブツダ」が重要視されていて、経典もゴータマ・ブツダの教説を踏まえていれば、自在に経典を創造することがゆるるされ、そうした環境の中で生まれた法華経や浄土三部経が日本仏教にとって基本仏典になっていること——といったことを挙げよう。こうした理解があつて後もわたしにとってJとGは同じ人として対峙したい人たちのなかの

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.131
神戸

2018年03月25日 通巻131号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価 600円(税別)